

差出人: NewsMail - metaFrontier.jp, LLC <newsmail@metafrontier.jp>
送信日時: 2013年8月8日木曜日 12:10
宛先: info@metafrontier.jp
件名: メタフロンティア ニュースメール Vol.17 (2013/8/8)

各位

いつもお世話になっております。
メタフロンティア合同会社の柴田賀昭です。

弊社が関わる業界団体の活動に関し、ファイルベース関連のトピックやセミナー情報、
その他各種ご案内などを不定期にてお届けいたします。

本メールの転送はご自由です。まわりにご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、
どうぞ遠慮なくご共有ください。

また配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作を
して下さい(宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入
していただければ自動的に削除されますので、どうぞ遠慮なく。

◆目次

- 柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」
- EBU(European Broadcasting Union) 発
- FIMS(Framework for Interoperable Media Systems) 発
- SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers) 発
- その他
- メタフロンティアからのお知らせ

◆柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」

- 第5回 ” 特許はジョーカー、それともハートのエース？”
前回、かつては半導体屋だった故に見えてくるものとしての“数がモノを言う”技術
トレンドの話をし、今回はその続きとしてイメージセンサーのお話をする予定でしたが、
ふと、最近勝手にマイブームになっている特許の話の先にさせていただくこととします。

柴田が初めて特許なるものを書いたのは入社2年目を過ぎた頃、当時はソニー中研で
半導体の研究をしていましたが、世の中のR&D部署のご多分に漏れず、当時の中研でも
ノルマとしての半年毎の特許出願が義務付けられていました。

しかし当時は特許なんて何だか凄い研究成果を出して初めて書けるものといった感
を持っていました。それに(明細書と呼ばれる)特許の文面を見ても、簡単なことを
わざわざ回りくどく冗長に表現するのが流儀のようで(その半分は誤解であったことを
後で知るのですが。。。尤も未だに明細書のあの独特の文体は好きにはなれません^^;;)、
実は学術論文の作成については多少の心得はあったものの、同じ技術文書とは言え、
特許はそれとは別世界の代物だ、という認識でいました。

とは言え研究員としての義務ですから、自らの研究成果を大きく膨らませ、結局は
(自らの研究テーマであった)半導体シミュレーションを活用した半導体ファクトリー
オートメーションといった話をでっち上げて何とか出願しました。

ちなみにこれは多くの大企業がそうであると思いますが、ソニーもまた研究者自らが
直接、特許明細書を書くのではなく、発明者(研究者)は自らの発明内容を詳説した発明
報告書を作成し、それをいわゆる特許部を通じて特許事務所(弁理士)に依頼して実際
に出願する明細書を書いてもらうという方法を採用していました。

さて、それから10年程が経ち、XMLを用いたマルチメディア関連メタデータの国際
標準規格であるMPEG-7標準化活動を経て厚木でXDCAMのメタデータ回りの開発に取り

組むこととなりました。当時、映像・放送メディア業界では“メタデータ”なる言葉自体はある種のパスワードとして一人歩きしていたもののその実体は乏しく、またXMLも業界では殆ど知られていないといった状況でした。

このような中で MPEG-7 での経験をフル活用して XML を用いた XDCAM メタデータ体系を構築できたことは、ある意味で幸せだったと思います。そしてもう一つ幸運だったのが、共に XDCAM メタデータ開発に従事していた上司がいわゆる「特許オタク」だったこと。当時はまだまだ“イノセント”(後述します)なエンジニアでしたので、自らのやってきたことの多くは(そのような状況下であれば)誰でも思い付くような“当たり前”のことばかりで、とても特許出願できるような“凄いもの”ではないといった(誤った?)認識でいました。

しかしながらその時、当の上司に言われたのが、実は特許がクリアすべき最初の条件は“新規性”、つまりそれ以前に同じ技術が存在しないことであって、それさえクリアすれば、特許取得の可能性はあるということでした。

先述したように放送業務に特化した XML ベースの本格的なメタデータの前例は世の中になかったものですから、多くの項目で“新規性”は問題はありませんでした。そこで当の上司に言われるがままに XDCAM メタデータ開発の過程で思い付いたアイデアを片っ端から特許出願し、結果的には(同僚の発明への連名も含め)メタデータ関係で 40 件以上の特許を出願するに至りました。

ここで話が済めば単に「多くの特許を出願したエンジニア」で終わった訳ですが、その後に予想もしなかった展開が待ち受けていました。何とその上司から「これから(厚木の)ビジネスにおける知的財産活用を検討する部署を作るので、手伝って欲しい。」とのこと。(中研時代のトラウマもあって^~;)元々特許にそれ程の関心があった訳でもなく、先の XDCAM メタデータ関連出願についても“言われるがまま”といったところもありましたので最初は躊躇しましたが、XDCAM メタデータ関連でやりたかったことはほぼ目途がついたこともあり、またそれまでの付き合いもあってその誘いに乗ることにしました。

とは言え、そもそも特許“制度”についてはど素人でしたから、まずはそのお勉強から始めました。ただ幸運だったのが、時は小泉元首相により「知財立国宣言」がなされた 2000 年代前半、甘利明氏による「われら知財派」なる本[1]が発行されたり、経産省/特許庁から「戦略的な知的財産管理に向けて」(知財戦略事例集)[2]なる文書が公表されたり、また様々な関連セミナーが開催されたりなど、ビジネスにおいて知的財産権をどう活用すべきかといったテーマが一種のブームの様相を呈しており、“教材”には事欠きませんでした。

結局、この事業部門の現場からの「知財のビジネスへの活用」検討の動きは品川のコンシューマー系や本家本元である本社知財センターも巻き込んだソニーの全社的な活動と発展し、柴田も否応なくその渦に巻き込まれていったのですが、それは兎も角、このような「特許屋」の立場で見えてきたのが、特許とはビジネスなる“ゲーム”をおこなうための駆け引きの道具、いわばトランプのジョーカーあるいはスペードのエースのようなものであるということでした。

さて、その話に深入りする前に、先述した“新規性”に加えて特許成立のもう一つの条件である“進歩性”についてお話します。ここで進歩性とは、「当業者(=貴方と同じ知識レベルを持った第三者)が容易に想到(=思いつく)できないもの」と定義されています。そして、これだけを見ればまさにエンジニアが思う“凄い!”でなければならぬと解釈しがちですが、実態はそうではありません。そもそも何をして“凄い”と思うかなんてヒトによってまちまちですから、特許審査(=特許は出願しただけでは権利化されず、審査を経て認可される必要があります)で“進歩性なし”と判断された場合はその根拠となる情報(先行技術と呼ばれ、多くの場合はそれ以前に出願された特許です)が示されます。つまり、証明責任は“あちら側”にあるのです。

ちなみに特許化のルールとして、余程の不備がない限り、いきなり駄目だしを喰らうことはありません。つまり特許審査をおこなう審査官は、これは特許にできないと判断した場合、拒絶理由通知というかたちで回答します。ここで多くの方が誤解しているのはこれは決して最終通告でなく、「これこれの理由で特許にできなさそうだが、貴方はどう思うか。」という“打診”です(なので、これを受け取って「ようやく我々の出願の審査を始めてくれたか。」と喜ぶ向きもあります)。そしてそこからどう反論していくかが

正念場です。

ここで大切なのは、自らのエンジニアとしての価値観の“凄い”は封印して、少しの違いがもたらすメリットを大げさに誇張(=本心は兎も角、“凄い”と言う)した上で、審査官が示した根拠情報に対する反論を論理的に組み立てることです。そして、その反論に“筋が通って”いれば、多くの場合は特許査定(権利化を認める通知)を出してくれます。

上記はまさに柴田が「特許屋」になってから経験したことでした。つまり、先述したXDCAM メタデータ関連で集中出願した案件が審査を経て拒絶理由通知が戻されてきたのがまさに自らが特許屋としてその対応を担当していたタイミングでした。そして特許査定に対する発明者への“ご褒美”制度が社内にあったことも相まって、それは気合いを入れてその対応をおこないました。そしてその中で見えてきたのがまさに先述したように、エンジニアとしての自らの(“凄い”といった)価値観とは無関係に、目標達成に向けて淡々と理論武装して反論するといった、まさに(ルールに基づく知的ゲームとしての)ディベートそのものである、ということした。

結果として、(他の発明者の出願への対応も含めて)取り扱った出願案件の80%以上の権利化(特許査定)を達成できたのは、このゲームで勝つ“コツ”を掴むことができたからだと考えています。

考えてみれば、特許とはそれを根拠に相手を訴えてビジネスを止めさせたり損害賠償を請求したりなど、その権利保有者にとんでもない権限を与える仕組みです。兎に角、法的強制力を伴うものですから、これを受けて立つ側も必死です(最初にやるのは、それが法的に無効であることを証明することであって、早い話、“新規性”を覆すべく徹底した先行技術調査をおこなうことです)。そして実際に“表に出て”法廷で争うといった事態に至るまでには、その水面下において人間臭い様々な“駆け引き”があります。そう、結局「特許屋」から見た特許とは、所詮ビジネスなる“ゲーム”の駆け引きにおいてそれを有利に進めるための手持ちのカード(切り札や捨て駒)、すなわちトランプゲームにおけるジョーカーやスペードのエースのようなものに過ぎないということです。

その結果、特許屋が考える「良い特許」とは、イノセントなエンジニア(振り返ってみると、特許屋を経験する以前の自らには、“イノセント”という語句がまさにぴったり当てはまります^^;)が考える“凄い発明”とは自ずから異なってきます。つまり、特許屋にとっては“ゲーム”の切り札として使えるかどうかが重要であって、それはすなわち相手の特許侵害が容易に検出できること、あるいは相手がそれを回避できないこと。その意味で真面目なエンジニアが“凄い”と思うような高度な理論を駆使した発明より、“当たり前で、誰でも思い付いて、やっていることが一目瞭然”といった発明の方が、特許屋的には遥かに価値が高いということです(尤も、そんな発明の多くは“新規性”で却下されるのがオチですが、もしそれが特許査定を取れたならば“大化け”する可能性があります)。

さて最後になりますが、実は気が置けないエンジニア仲間との飲み会でたまたま上記のような話をしたところ大ウケしたもので、ならばどこかでそんな話をさせてもらえる場はないものかと探していたところ、月刊ニューメディアが主宰する「Xデー勉強会」の枠組みでお話をさせていただける機会を頂戴しました(8/22 15:00-)。

その目的は、「知的“ゲーム”である特許の“基本ルール”を勉強しましょう。」ということですが、その過程で、これまで経験し見聞きしてきた中からとてもここでは書けないことも含めてホンネのところをお話させていただきたいと思います(なお、ソニーの“機密事項”には一切触れませんのであしからず)。

詳細案内につきましては下記「メタフロンティアからのお知らせ」にも再掲しましたので、ご興味を持っていただけましたら是非、ご参加下さい。

[1] <http://www.amari-akira.com/book/>

[2] http://www.jpo.go.jp/torikumi/hiroba/pdf/chiteki_keieiryoku/01.pdf

◆EBU(European Broadcasting Union)発

- EBU Technology & Innovationの新ディレクターに、英ITV出身のSimon Fell氏が就任しました。

http://tech.ebu.ch/news/ebu-names-simon-fell-as-new-director-of-02jul13?newsletter_august2013

- David Wood 氏による“Clouds and Cloud Services”なるタイトルの動画が公開されました。
http://tech.ebu.ch/news/david-wood-on-clouds-and-cloud-services-22jul13?newsletter_august2013
- 7/6(土)-11(木)にブリュッセル自由大学で開催されたフリー/オープンソースソフトウェアを紹介するイベント“the Libre Software Meeting 2013”において、EBU メンバーによるメディア関連のフリー/オープンソースソフトウェアの利用状況が報告されました。
http://tech.ebu.ch/news/increased-support-for-open-source-softwa-10jul13?newsletter_august2013
- EBU/DVB での共同検討を踏まえた UHDTV の今後のロードマップを議論する目的で 11/25(月)-26(火)の日程で Geneva で開催予定の“UHDTV: VOICES & CHOICES”のプログラムが発表され、参加者を募集中です。
http://tech.ebu.ch/events/uhdtv13?newsletter_august2013

◆FIMS(Framework for Interoperable Media Systems)発

- FIMS Technical Board の F2F 会議が、7/22(月)-24(水)の日程で New York で開催されました。
http://wiki.amwa.tv/ebu/index.php/FIMS-DEV_21030622

◆SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers)発

- SMPTE 標準化コミュニティ San Jose 会合(2013/6/19-22)の活動報告が発行されました。なお、弊社が取り組む「UMID 応用プロジェクト」活動内容も報告されていますので、詳しくは“UMID”にて検索してみてください。

<https://www.smpte.org/sites/default/files/files/SMPTE%20Standards%20Quarterly%20Report%20June%202013.pdf>
また、同会合で撮影された Hans Hoffmann 氏を始めとした標準化コミュニティのリーダーシップメンバーらのインタビュー映像も併せて公開されました。

http://www.youtube.com/watch?v=DPeTsklq2Yk&feature=youtu.be&utm_source=SMPTE+MONTHLY+--+July+2013&utm_campaign=Monthly&utm_medium=email

- SMPTE Newswatch 2013 年 7 月号が発行されました。

http://myemail.constantcontact.com/SMPTE-Newswatch--Broadcast-Networking-Infrastructures--HEVC-Rollout--VP9--and-YouTube-Space.html?soid=1109962569416&aid=CpEwT_A8JQE&goback=%2Egde_71716_member_262327913

- SMPTE Monthly Newsletter 2013 年 7 月号が発行されました。

http://campaign.r20.constantcontact.com/render?llr=iwnzoxjab&v=0011yfyIBiONNqFlnjwVwkz0oYf94AAyD4kDg2Ce8mGhxJN4LI17zzpcwIj7JuWhUBYsF9zIK2N-Wm5a0LSzAgr26dV3gxHTIGowhmpGdJBOS2q4SkWaEi142_QYnTabnpJSzXIE5MvdwsN75q_tke_rIYHIzwo0tSjWybjjJmIvnB3p8mngnIBJ3fIz8F8Wvkducrdg4LIPXe53ctSxegGCEXw_8fK3pf7T2FUd9EPyrnaijksLdZ12MLwk4n0r0hU2XhRb1pn3S-817hYJs28Y9jgsFaX3

- 10/22(火)-24(木)の日程で Hollywood で開催予定の SMPTE 2013 年次技術会議が、引き続き参加者を募集中です。

https://www.smpte.org/atc2013/?utm_source=SMPTE+MONTHLY+--+July+2013&utm_campaign=Monthly&utm_medium=email

また、その前哨戦として、10/21(月)に“Next-Gen Image Formats: More, Better, or Faster Pixels?”のタイトルにてシンポジウムが開催されます。

https://www.smpte.org/atc2013/symposium?utm_source=SMPTE+MONTHLY+--+July+2013&utm_campaign=Monthly&utm_medium=email

- “ACES: Glass to Glass”なるタイトルのオンラインセミナーが、8/23(金) 2:00(日本時間)から開催されます。

https://www.smpte.org/webcasts?utm_source=SMPTE+MONTHLY+July+2013&utm_campaign=Monthly&utm_medium=email

◆その他

- 10/23(水)-29(火)の日程で Hanoi で開催予定の ABU General Assembly の公式ウェブサイトが開設されました。
<http://www.abuhanoi2013.com/>

- Devoncroft 社による 2013 Big Broadcast Survey (BBS) の一環として、ワールドワイドな業界における放送技術ベンダのベスト 30 が発表されました。

<http://blog.devoncroft.com/2013/06/26/tracking-changes-in-the-commercial-importance-of-broadcast-industry-trends-2012-2013/>

- Mr. MXF こと Bruce Devlin 氏 (AmberFin CTO) による無料オンラインセミナー "Bruce's Shorts - Tip of the Week..." (日本語字幕付) が、好評配信中です。
<http://www.amberfin.com/shorts-jp/>

◆メタフロンティアからのお知らせ

(新着情報: <http://metafrontier.jp>)

- 月刊ニューメディア編集部が主宰する X デー勉強会の一環として、8/22(木) 15:00-16:30 の日程で、銀座の同誌編集部 NW セミナールームにて、弊社の柴田賀昭が、「眼からウロコの特許のキホン」なるテーマのセミナーを開催いたします。以下、同誌編集部による開催案内をそのまま引用しますので、参加ご希望の方は同誌編集長の吉井様 (yoshii@newwww-media.co.jp) まで直接お申込み下さい。

==== ここから =====

■X デー勉強会ならではの「文系でも技術を学べシリーズ」■

- ・テーマ：眼からウロコの特許のキホン
- ・講師：柴田賀昭氏 (メタフロンティア (映像メディアとメタデータの技術コンサルティング) 代表)
- ・内容紹介：

技術に関わる方なら耳にすることも多い特許、「アップル対サムスン特許訴訟」、「青色 LED 裁判で 200 億円判決」など時々派手に新聞紙上を賑わすものの、今一つピンとこないといった感想をお持ちの方も多いのでは？

Media SOA/FIMS (Framework for Interoperable Media Services) を日本に紹介し、また SMPTE で業界標準 AV 素材識別子 UMID (Unique Material Identifier) の運用ルール策定を主導するメタフロンティア柴田賀昭氏のもう一つの顔、それは「特許オタク」であったということです。

時は「知財立国宣言」がなされた 2000 年代前半、XDCAM 関連で 40 件以上の特許を出願し [1]、その後知財関連部署に転じてビジネスにおける特許制度活用を深く調査研究し、また自ら中間処理を手掛けて担当案件の 80% 以上の権利化を達成した経験を持つ柴田氏はこう言います「技術屋と特許屋で、特許に対する見方がこんなに違うなんて！」。

[1] これまでに柴田氏が出願した特許の一覧です。

<http://metafrontier.jp/drupal/ja/about/members/patents>

今回の X デー勉強会では、そんな柴田氏によるホンネの特許セミナーを実施します。日頃、「特許って何だろう？」と、もやもやした感覚をお持ちの方、どうぞふるってご参加下さい。

- ・主な講義内容：
 - 特許とは？
 - 特許を取る or 取らない？
 - 発明、出願から権利満了まで
 - 「良い特許」とは？

- まとめ

◆開催日時：8月22日(木) 15時～16時30分すぎ (開場：14時45分)

◆会場：ニューメディア編集部のNMセミナールームにて

- ・ <http://www.newww-media.co.jp/aboutus.html>
- ・ 東京都中央区銀座2-12-5 銀座NFビル3階
03-3542-5231
- ・ 1階が「花彙」という花屋の入る雑居ビルの3階です。

◆参加定員：先着10名

参加費：@5,000円(当日、受付にて。領収書をお渡しします)

■■参加申込み ⇒このメール返信で

(柴田注、月刊ニューメディアの吉井編集長(yoshii@newww-media.co.jp)まで)

- ・ 名前：
- ・ 社名((株)を忘れずに)：
- ・ 所属：
- ・ ケータイ：
- ・ 上記社名と領収書の宛名が異なる場合：

===== ここまで =====

- 8/28(水)～30(金)の日程で工学院大学(新宿キャンパス)で開催予定の2013年映像情報メディア学会年次大会の第14部門 放送現業(8/30 10:20-12:00)において、弊社の柴田賀昭が、「DNSを用いたUMID解決の実現」なるタイトルにて、弊社が取り組むSMPTE UMID応用プロジェクト(UMID応用SG及びRP205改定AHG)の最新状況を報告します。

(開催案内)

<http://www.ite.or.jp/data/event/new/?mode=disp&key=52&lid=&sort=&word=&page=1>
(プログラム詳細)

<http://www.ite.or.jp/event/nenji2013/daimoku2013.pdf>

- ファイルベースワークフローを導入したものの「こんな筈ではなかった。」とか「何とか使ってはいるものの完全なブラックボックス状態で、万一の時が不安。」などといったことでお困りのユーザ様はいらっしゃいませんか？

特にこれまで親しんできた技術トレンドとは“非連続”なITベース技術が業界に急速に広がるにつれ、ユーザ様とベンダ様との会話がうまくかみ合わず、関係を損ねてしまったといったお話もちらほら伺っております。

ファイルベース技術は今も日々改良が進められているものの、残念ながら現時点においても、(ベンダ様を問わず)ユーザ様のあらゆる要求を完全に満足できるようなソリューションが提供可能な技術レベルには達していません。

従ってファイルベースワークフローの導入を本当に成功させるためには、ユーザ様、ベンダ様が互いの深い信頼関係の元、技術とコストの兼ね合いから、その時点での「ベストソリューション」を互いに切磋琢磨しながら探っていくといった姿勢こそが最も大切なことであります。

弊社ではファイルベースに関する豊富な技術知識を元に、ベンダニュートラルな立場から、ユーザ様とベンダ様が相互理解をより深めて「ベストソリューション」を見出すための“技術通訳”といったお手伝いをさせていただきたいと考えております。

つきましては、何かお困りのことがございましたら、まずは弊社(info@metafrontier.jp)までお気軽にお声掛け下さい。

- MXF(Material Exchange Format)の出張セミナー、引き続き好評提供中です。

“MXFは初めて”という方々を対象にMXFが絡むビジネス判断をおこなう上で必要とされるMXF技術の基本知識の習得を目的とした「基礎編」と、これから本格的にSMPTEのMXF関連規格書を読みこなしていく方々を対象に、その前準備として必要とされるMXF技術の全体像の把握を目的とした「応用編」をベースに、御社のニーズに応じたかたちにカスタマイズして提供させていただきます。

その他、ご要望によりXML(eXtensible Markup Language)の基本やFIMS等の技術セミナーにも柔軟に対応させていただきますので、まずは弊社(info@metafrontier.jp)までお気軽にお問合せ下さい。

今回のご紹介は以上です。

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

本メールは、弊社スタッフがこれまでに名刺交換させていただいた方や、弊社 HP からのお問い合わせの際、アドレスをご登録いただいた方などにお送りしております。

配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作をして下さい(宛先: newsmai@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入していただければ自動的に削除されますので、どうぞ遠慮なく。

また本メールを転送などで受取られた方で、今後の受信を希望される場合は、一行目に「配信希望」とご記入の上、お名前、会社名(あるいは所属組織名)を添えて下記宛先にご連絡いただければ、次回から送信させていただきます。

また本メールに関するご意見、ご感想などがございましたら、こちらも下記宛先にお送り下さい

(宛先: request4newsmai@metafrontier.jp)。

編集/発行 : メタフロンティア合同会社 柴田賀昭
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-13-12 アーバンビル 6F
URL: www.metafrontier.jp

Copyright (C) 2012-2013 metaFrontier.jp, LLC. All Rights Reserved
